

レールモントフにおけるウクライナのテーマ

中 條 直 樹 近 藤 俊 介

はじめに

19世紀のロシア文学作品には、小ロシア(ウクライナ)人、ユダヤ人、ジプシー、ドイツ人、ポーランド人、タタール人など、様々な異民族が登場する。彼らの多くは滑稽な脇役をあてがわれているが、その紋切り型、すなわちステレオタイプは、人が多民族状況下に置かれると互いにどのような偏見を抱くものなのか、という問題を解明する上での重要な資料となる。

ステレオタイプという概念は、外界の認識を容易にする機能として、1922年のリップマン(1997)により提唱されて以来、米国のベッテルハイムとジャノウィッツ(1986)や、アロンソン(1994)らにより研究が行われ、わが国においても小川(1959)をはじめ中里(1982)、亀田(1986)、辻(1986)、吉森および大坪(1988)、松井および上瀬(1994)、池上(1995)らによって同問題が取り上げられてきた。最近ではとりわけポーランドのバルトミンスキイ(1997)によるスラヴ地域の研究が注目される。

バルトミンスキイ(1997)は1983年にポーランドのルブリンで、また1993～4年にはドイツのウェストファーレンで、学生を対象に諸民族に関する意識調査を行い、民族のステレオタイプの内容や支持率などを比較し分析を行っている。

ステレオタイプの研究は、このようにアンケートなどの社会学的方法に基づいて行われるのが一般的である。本稿はステレオタイプ研究の資料として文学作品を扱うことで、ロシア人の対ウクライナ人観を明らかにしようとするものである。ところが、従来の研究に同様の視点から行われたものはないことから、まずは比較的資料の整っている19世紀のロシア作家レールモントフを例に、方法論上の問題点を明確にしておく必要がある。

方法論

ステレオタイプ研究において文学作品を資料として用いるに際して、次のような疑問が浮上する。すなわち作家が当時のいかなる流派(ロマン主義または写実主義)や、階級、職業、年齢、性別を代表し、また作家の描いた主人公や脇役は、社会のいかなる層の見解を代弁しているか、という問題である。

通説では、レールモントフはプーシキンの後継者とされ、ロマン主義から写実主義への移行期の作家と位置づけられている。しかしながら文学作品がいかなる「主義」で書かれるにせよ、新聞記事や政府統計でない限り、架空の話であることに変わりはない。資料の架空性は、偏見や紋切り型など現実に基づかない歪んだ観念のものを取り上げる限りにおいて、妨げとはならないばかりか好都合でさえある。

金子(1975)も述べているように、レールモントフは『現代の英雄』で「デカプリスト事件後の時代のロシアの貴族インテリゲンツィヤの悲劇」を描いている(p.6)。小説の主人公がインテリで、社会のエリートに属していることは明らかである。主人公ペチョーリンは、ベリンスキーら複数の同時代人の証言によれば、レールモントフそのものであるが、木村(1975)のように、ペチョーリンとレールモントフを同一視することは「大きな過ち」で、「あまりにも単純な、『教養の程度のおそまつな』読み方」(p.208)との見方もある。

また、この小説はエリートの目(より厳密に言えば小説の語り手である「私」と主人公)を通して語られる形式をとっている。従って、その中で主人公が異民族に対して抱くイメージは、社会のエリートから見た異民族像を表すものである。さらに、文学に登場するこれら異民族の多くは大衆であることから、作品に反映されているのは対等大衆間の関係ではなく、エリートと大衆との関係と見るべきである。

さて、レールモントフの長編小説『現代の英雄』には、主人公ペチョーリンのほかにマクシム・マクシームィチ、ベーラ、ヴェーラ、グルシニツキイそしてヴーリチなど、多くの魅力的な人物が登場する。本稿では脇役である「盲目の少年」を敢えて大きく取り上げるが、それは、本稿の主眼が個々の作品や作家の研究ではなく、異民族のステレオタイプの究明に置かれているからである。

ステレオタイプは小説において主人公よりも脇役のほうにより現れる。詳細に描かれる主人公には作家の意識が深く刻み込まれるが、無造作に書き流される脇役にはその無意識が反映される。エリート作家といえども無意識においては社会一般の人々とつながっている。従って脇役を研究することにより、作家の個性という束縛を受けることなく、一般常識や社会通念の深層に到達することが可能となる。天才的作家の独創的思想は本稿においては興味の対象とはなり得ない。作家の偉大さは一般の人々の心情を巧みに表現する能力においてのみ認められるべきものである。

次に、当論考では19世紀ロシアの文学作品を取り上げるが、この「19世紀」や「ロシア」といった時代的・地理的な制約は、普遍的な結論を導き出すための妨げにはならないのだろうか。これについては、当論考の方法論に基づいて得られる結論を、現代人の行動様式を究明する社会学や、動物を含めた生物全般の習性を明らかにする生態学などの研究成果と比較することにより、その普遍性および妥当性を証明しなければならない

いと考える。

以上をまとめると次のようになる。文学作品には、作家と主人公の帯びるエリート性という限界があるが、この問題は1人の作家や1つの作品を詳細に研究せず、複数の作品を比較しその共通項を探ることにより解消される。非現実的な偏見を論じるに際し、文学の架空性は障害とはならない。主役ではなく脇役を分析することで、作家という枠にとらわれずに一般常識や社会通念を把握することが可能となる。資料の時代的および地理的な制約は、結論を社会学や生態学など他分野の研究と比較することにより克服され得る。

上記の方針に従って次に考察を試みる。

『タマーニ』(1839 - 40)

『タマーニ』は、レールモントフ(1814 - 41)の長編小説『現代の英雄』を構成する5つの短編小説のうちのひとつである。

タマーニとは現在のロシア・クラスノダルス地方の半島の先端に位置する港町の名で、地理的にはカフカス山脈の西端にあたり、海峡を挟んでクリミア半島がある。この土地には古くから古代ギリシア人、アルタイ系遊牧民族のハザール人、ロシア人、トルコ人、コサック、ソビエト赤軍、ナチス・ドイツなどが到来した。「タマーニ」という地名は8 - 9世紀にこの土地を支配したハザール人がつけた(『ソビエト大百科事典(第2版)』)。

ロシアの文芸批評家ベリンスキイ(1811 - 48)はこの小説のあらすじを次のように要約している。なお訳は出かず子(1976)による。

「ペチョーリンはタマーニで海岸の或るいやな小屋に泊まった。その小屋で彼が見いだしたのは14歳ばかりの盲目の少年と謎めいた娘だった。その二人が密輸業者であることが偶然のことからわかる。彼は娘のきげんを取るが、冗談に二人を密告するぞと二人をおどす。その日の夕方彼女はセイレネスのように彼のところにやってきて、愛の告白で誘惑し、海岸での夜のあいびきにやってくるように言う。もちろん、彼は姿を見せるがピストルを用意していた。娘の言うことやることすべてに奇妙なところと何かしら謎めいたものがあって、早くから不審の念が生まれていたからだ。謎の娘は小舟に乗るように誘った - 彼はちゅうちょしかけたが、もはや退くひまもなかった。小舟は動き出し、娘は彼の頸に巻きつき、何か重いものが水中におちた.....彼はピストルに手をやったが、それはもうなかった.....そこでこのあいだに恐ろしい格闘が始まった。遂に男が勝った。折れた櫂で彼はどうにかこうにか岸にまで漕ぎつけたが、死からのがれて水気を切っている謎の妖精の娘を月光のものに見た。やがて彼女はヤンコと一緒に遠ざ

かっていった。このヤンコはきっと彼女の愛人で、主要な密輸業者の一人であった。局外者が彼らの秘密を知ったので、そこにこれ以上とどまることは危険だった。盲目の少年も、ペチョーリンから手箱と銀ぶちの劔とダゲスタンの短劔を盗んで姿を消した。」(p.3.)

ベリンスキーの要約では謎めいた美しい娘のことが特に強調され、幻想的な恋愛冒険小説であるかのような印象を受ける。レールモントフは作品中で、この娘のことを「ルサルカ」や「ウンジーナ」(いずれも「妖精」の意味)などと呼んで、作品全体に謎めいた感じを与えている。レールモントフと同時代を生きたツェイドレル(1989)の回想記によれば、そのモデルとなったのは当時19歳前後であった混血のタタール娘で、ヨーロッパ人に近い顔だちをしていた(c.257)。作品においてこの少女は、もう恋愛感情を忘れかけていた主人公ペチョーリンの心に再び情熱を呼び覚ます。しかしながらこの小説では、娘に劣らぬ謎めいた役柄を盲目の少年や耳の遠い宿の老婆、タタール人の密輸業者などが担っている。とりわけここでは盲目の少年に着目したい。

ロシア人旅行者の手記という形式で書かれたこの短編小説には、ロシア語で話しかける主人公に対して小ロシア方言で答える謎めいた少年が登場する。少年は「正しいロシア語を話す能力がありながら、故意にロシア語と小ロシア(ウクライナ)語を混ぜたような方言で話す。

少年が主人公ペチョーリンと小ロシア方言で話す場面は全部で3箇所ある。最初の場面は、ペチョーリンが宿を捜し求めて海辺のあばら家にやってきたが、家の主を呼んでも返事がないので、そこに現れた少年に話しかけてみるどころである。次はこの少年が盲目であることがわかった後、ペチョーリンが憐憫と不快の入り交じった複雑な気持ちを抱きながら思い切って少年に話しかける場面である。最後は、盲目の少年が真夜中に包みを持って密かに海辺に出かけるのを目撃した翌日、ペチョーリンが少年に詰問する場面である。

『タマーニ』の邦訳の歴史は古く、この部分の訳には訳者の苦勞のあとが滲み出ていて興味深い。最も古い森鷗外(1892;1939)の訳は原文と多少異なるが、中村喜和(1971)によるとこれにはドイツ語からの重訳という理由が考えられる(p.444)。中村白葉(1964;1971;1972;1975)は当該部分を旧仮名遣いで東北弁風に訳しており、中村融(1958;1961;1981)もそれを踏襲しているが、1981年版では差別語の訳などに若干の変化が見られる。北垣信行(1969;1973;1981;1982)の訳では九州あるいは西日本の方言が採用されている。中村喜和(1971)の訳では再び東北弁が復活しているが、鷗外風に解説も加えられている。岡林菜穂(1974)は唯一関西弁を採用している。江川卓(1980;1991)の訳では九州弁が使用されているほか、訳注も加えられている(詳細は資料参照)。

この小ロシア方言を話す盲目の少年のモデルとなったのは、既に出(1976)も指摘しているように、老後タマーニの鐘楼守となった半盲目の男で(p.6)、ポマズニョヴァ(1976)によるとその名前はヤーシカ・リャブーシカであった(c.3)。しかしながら少年の民族籍は作品では明らかにされず、同時代人の回想録からも少年がウクライナ人であるとの確証は得られない。

とはいえレールモントフが小ロシア方言の響きに与えた役割は無視できない。主人公は少年が小ロシア方言で話すのを聞いた後、彼が盲目であることに気づいて、深い哀れみを覚える。少年はロシア人旅行者と話す際、ロシア人からすれば片言で文法的にも正しくない小ロシア方言を故意に使用することで、相手の慈悲心を刺激しようと考えたのである。この少年は盲目であることを知った相手がどのような反応を示すのか、熟知している。主人公がしばし沈黙していると、盲目であるはずの少年はそれを察したかのように微かに笑みを浮かべる。そしてこれが主人公に「最も不快な印象」を与える。しかし相手の哀れみを引き出す少年の作戦は功を奏し、主人公に油断させる。そして少年は旅行者の荷物を盗んで密輸団に渡すことに成功するのであった。

故意に方言で話すことで相手の慈悲心を刺激するという作戦は、ゴーゴリの『降誕祭の前夜』にも見られる。当時の首都ペテルブルグにおいてウクライナ・コサックは、ロシア語が話せるにもかかわらず、女帝に懇願する際には故意に百姓訛り、つまりウクライナ方言を使うのである。

なお、ロシアの民俗学者ダーリ(1989)は小ロシア方言に近いノヴォロシア方言について、ロシア語とウクライナ語の混ざったような発音で、不愉快な響きであると特徴付けている。

タマーニの少年が、少女やタタールの密輸人と純粋なロシア語で話すのに対し、ロシア人である主人公には土地の訛りで応える。小屋の女主人である老婆も、主人公が話しかけると耳の遠いふりをする。故意に訛りで話したり耳の遠いふりをすることで、タマーニの住人の閉鎖的性格が示されている。

さて、タマーニはレールモントフによって「ロシアの町でもっとも汚らわしい町」と酷評された町であるが、意外にも地元の人には彼の短編『タマーニ』を愛好している。

ポマズニョーフ(1976)によれば、レールモントフの泊まった小屋は「記念館」として再建され、その外観はもちろん館内の内装までもが、作家自らが描いたスケッチや作中の描写、その他の資料などを基に忠実に再現されている(c.3)。またヴェレングリン(1978)によると、タマーニには「レールモントフ文献資料館」も設立され、作家の生前および死後の貴重書、世界各国の言語における翻訳文献などを集める運動が起きている(c.14)。ソロキン(1977)は、この事業には多くの地元住民が関わっており、もはやタマーニがレールモントフの滞在した当時のような「汚らしい町」ではないと報告して

いる(c.4)。

『リゴーフスカヤ公爵夫人』(1836 - 7)

『レールモントフ百科事典』巻末の「頻語事典」によれば、レールモントフの作品には「小ロシアの」という形容詞が2度、「ウクライナ」ということばも2度登場する。「小ロシアの」という形容詞のひとつが『タマーニ』で使用されていることは、既に見た通りである。別のひとつは『リゴーフスカヤ公爵夫人』の次の一節にある。

「(前略)二人目は文官だった。これはペテルブルグの社会における典型的な人物のひとつであった。彼はかなりの身長がありひどく痩せていたので、イギリス仕立ての燕尾服を肩に羽織ると、まるでハンガーにでもかけたかのようだった。硬くつやのあるネクタイは彼の角張ったあごを支えていた。唇のない彼の口はボール紙でできた仮面にペンナイフで開けた穴を思わせ、こけて浅黒い色をした頬にはところどころニキビのような小さな穴が開いていたが、それはひどい天然痘の跡であった。鼻はまっすぐ延びていたが、付け根から先端までが同じ太さで、下のほうは切り取られたような感じで終わっており、灰色で小さな眼はいかにも厚かましそうで、眉は濃く、狭い額は突き出ており、黒い髪は短く刈られ、ネクタイの上からはサンシモン風のひげがのぞいていた。彼はすべての人物と知り合いであり、どこかに勤めて出張を依頼され、帰ってくると - - 官位をもらい、常に中流階級の人々と交際して自分と上流階級とのつながりについて自慢し裕福な年頃の娘たちの尻を追いかけてまわし、数多くの構想を打ちだしては様々な証券を売りに出し、いろいろな本の講読を皆に薦め、あらゆる文学者やジャーナリストと知り合いであり、いくつかの雑誌に無名の論文を発表したことを鼻にかけ、誰も読んだことのないパンフレットを発行し、彼自身のことばによれば山ほどの仕事に追われ、午前中をずっとネフスキ大通りで過ごしていた。この人物の描写を終えるために最後に言っておくと、彼の苗字は小ロシア風であったが、『ゴルシェンコ *го Шенко*』の代わりに『ゴルシェンコフ *го Шенков*』と名乗っていた」(c.423)。

この人物の特徴をまとめると次のようになる。小ロシアの出身であることにコンプレックスを感じ、(ゴゴリの『昔かたぎの地主たち』にもあるように)自分の苗字をロシア風に改変する。彼は異国ロシアの社交界にとけこむために虚栄をはって忙しがり、自分の重要性を証明しようとする。

チストワ(1990)の解説によれば、この人物のモデルとなったのはペテルブルグのジャーナリストで侍従だったH. . . タラセンコ=オトレーシコフ(1805 ~ 1873)で、皇帝官房直属の特別警察、第三課との結びつきを噂されていたという(c.632)。なおこの実在の人物の名前も小ロシア風であることを付言しておく。

『 . A . シチェルバートワへ』(1840)

既述のとおり、レールモントフの作品では「ウクライナ」ということばが2度使われているが、それは詩『 . . . シチェルバートワへ』(1840)においてである。その内容は次の通りである。なお訳は論者による。

「窮屈な上流社会と / 疲れるばかりの豪華絢爛な舞踏会のかわりに / 花咲き乱れるウクライナのステップ(草原)を / 彼女は失った / / しかし古里の南国の / 雰囲気は失われないままでいた / 氷のように / 冷酷な上流社会のなかにあっても / / ウクライナの夜々のように / 星の永遠の瞬きのように / 秘められた真実に満ちている / 彼女の芳しい口からもれる言葉は / / 青く透き通った / 南国の空のような、ふたつの眼 / 砂漠を吹く風のような / その人の優しさに思い焦がれる / / 熟したスモモのような / 赤みのある柔らかい頬 / 太陽の光も / その金の巻き毛にからみつく / / 冷静な判断力で / 母なる国の悲劇を受けとめながらも / 神への信頼に満ちた / 無垢な信仰を抱き続ける / 母国の民と同じように / / 周囲の支えに寄りかかることなく / 気高い冷静さをもって / 嘲りと悪意を耐え忍んでいる / / 厚かましい視線を感じても / その激情は爆発することがない / 急に恋の虜になることはないが / いたずらに愛想をつかすこともない。」(c.186-7)

自然豊かなふるさとを遠く離れて寒い北国に連れてこられた女性が、都会人特有の冷たさや民族的偏見を一人で耐え忍びつつも、南国らしさを失わずに生きている姿に、レールモントフ(当時26歳)は深く共感している。

ザスラフスキ(1962, 1981)は、レールモントフがウクライナを「母なる国の悲劇」と呼んだことについて、この作家がウクライナとその自然を愛し、帝政下で抑圧を受けていたウクライナ民族に共感したと述べている。しかしそれは一面的な解釈にすぎない。この作品の創作の動機となったのは、ある民族の悲劇的な運命への共感というよりも、一人の不遇なウクライナ女性への共感であった。

レールモントフの同時代人の回想録によれば、シチェルバートワは夫と息子を相次いで亡くした20歳の未亡人である。レールモントフはこの若い未亡人に恋をし、結婚を考えていたとさえ言われる。彼はこの女性をめぐってフランス大使の子息バラントと決闘沙汰を起こす。レールモントフには相手を殺す意思がなく、意図的に宙に向けて打ったが、相手の弾はレールモントフの胸をかすめ、危うく一命を取り留めた。後にこの決闘がロシアとフランスの外交問題にまで発展し、レールモントフはコーカサスに流刑となった。

シチェルバートワはペテルブルグでどのような扱いを受けていたのだろうか。カラムジナ(1989)は1839年8月1日の手紙に、シチェルバートワに食事に招かれたので、断れずにつき合ってみたが、実際に会ってみるととても感じのいい人だったので、もうこ

れ以上あの人をバカ呼ばわりしないことにする、などと書いている (c.286-287)。この手紙から判断するかぎり、シチエルパートワはベテルブルグの社交界から疎外されており、『リゴーフスカヤ侯爵夫人』のゴルシェンコフと同様、ロシアに適應できないウクライナ人であった。

作者レールモントフ自身もロシア人(ただし先祖はスコットランド系移民)でありながら、ロシア社会に適應できていなかった。『同時代人の回想録』に収められているチラン(1989)やメリンスキイ(1989)の証言によれば、彼は士官学校時代から人に恨まれやすい性格であった。そのような性格が災いして再び決闘沙汰となり、遂に命を落とすこととなった。当時の皇帝はレールモントフの非業の死を耳にして、「犬には犬死にを」と言ったと伝えられている。

おわりに

本稿では方法論を明確にした後、レールモントフの作品に現れたウクライナのテーマについて考察を試みた。その結果、いくつかのステレオタイプから判断すると、小ロシア方言の響きがロシア人の耳に哀れみを喚起することや、ロシア社会に適應できていないウクライナ人の姿など、いくつかの点が明らかになった。今後はレールモントフ以外のロシア作家についても同様の調査を行うことで、ロシア文学におけるウクライナのテーマ、あるいはロシア人の意識におけるウクライナ人という問題の全容を明らかにしていきたい。

資料

森鷗外訳(1892;1939)

A.主人の男はいづくにかある。あらず。この答は小魯西亜語なりき。あらずとか。この家には亭主といふもの居らざるにや。さなり。さらば女主人はいづくに居るか。村にゆきぬ。さらばわが泊るべきところの戸をば誰か開くべき、と呼びつゝ、われは足もて戸を蹴たるに、戸はおのづからあきて、内よりは湯氣出でゝ我面を撲ちたり。(pp.2-3;93)

B.そちはこの家の女主人の子か。否。さらばそちは何者ぞ。あはれなる孤なり。女主人に子供ありや。否。娘一人ありしが、「タタアル」人と海を越えて逃げたり。その「タタアル」人とは何者ぞ。さなり。誰かそを知るべき。クリムのものにやありけむ。ケルチユの舟人にやありけむ。(pp.3;94)

C.われはこれに向ひて、いかに小僧、よべ包を腋に抱きていづくにかゆきし、と問

ひつゝその耳を引きたり。童は忽ち泣き出し、また太息つきて、涙聲していふやう。よべいづくへゆきしかとのたまふか。いづくへもゆき候はず。包みを抱きてとのたまふか。いかなる包みを。(pp.7-8 ; 99)

中村白葉訳 (1964 ; 1971 ; 1972 ; 1975)

A .「主人はどこにある？」 - 「あねえ。」 - 「なに、ぢやあ、この家には主人がないのか？」 - 「うん。」 - 「ぢやあ、上さんは？」 - 「村さ行つただ。」 - 「ぢやあ誰が戸をあけてくれるんだ！」(pp.341 ; 95 ; 355 ; 355)

B .「お前はこゝの主人の子か？」と、私は遂に彼に訊いた。「いんや。」 - 「ぢやあ何だ？」 - 「孤児だよ、貧乏な。」 - 「上さんには子はあるのか？」 - 「ねえ。娘があつたけど、韃靼の男と海の向こうさ逃げちやつた。」 - 「どういふ韃靼と？」 - 「誰が知るもんけえ！ クリミヤの韃靼で、ケルチ生れの水夫だよ。」(pp.342 ; 96 ; 356 ; 356)

C .「おいこら、盲の小鬼、」と私は彼の耳をひつぱつて言った。「きさまはゆうべ変な包みを持つてーたいどこへ行つたんだ - うん？」すると、急にわが盲目は、泣き出し、叫び出し、ため息をつきだした - 「どこへ行つたつて？どこへも行きやしねえだよ包みを持つてつて？ あんの包みでえ？」(pp.344 ; 101 ; 358 ; 358)

中村融訳 (1958 ; 1961 ; 1981)

A .《主人はどこだ？》 - 《いねえ》。 - 《どうした？ 全然居らんのか？》 - 《うん》 - 《じゃ、神さんは？》 - 《村さ行つたよ》。 - 《道理で戸を開けてくれる奴もいないわけだな？》(pp.267 ; 267 ; 101)

B .《お前は主人の息子かい？》 - としまいにおれがこの子にたずねた。 - 《いんや》。 - 《じゃ、なんだ？》 - 《みなし児だよ、片輪者でね》。 - 《神さんにや子があるのか？》 - 《いんや、娘がいたけど、タタール人と一緒に海の向こうさ逃げちまつただ》。 - 《どんなタタール人だ？》 - 《どんな人だか知らねえだ！ クリミアのタタールで、ケルチ生れの船乗りだっただ》(pp.268 ; 268 ; 102)

C .《おい、めくらの子鬼め、 - とおれは奴の耳をひつぱつて言った - さあ、白状しろ、お前、夜中に包みをもってどこへ行つたんだ、え？》すると、このめくらは、だしぬけに泣いたり、わめいたり、溜息をついたりしだした。 - 《おらがどこへ行つたつて？どこにも行きやしねえだ包みをもってだと？ どんな包みだね？》(pp.270 ; 270 ; 107)

北垣信行訳 (1969 ; 1973 ; 1981 ; 1982)

A .「主人はどこへ行つた？」「おりはせんよ」「どうしてだ、ぜんぜんいないのか？」

「ええ、ぜんぜんです」「じゃ、おかみさんは?」「村へ出かけちよるよ」「じゃ、だれがこのドアをあけてくれるんだい」(pp.387-8; 403; 403; 295)

B.「おまえは主人の息子が?」揚句のはてに、おれはその子にきいてみた。「いいや。」「じゃ、何なんだい?」「みなし子じゃ、文なしなんじゃ」「おかみさんは子持ちかい?」「いいや、娘さんがおったんじゃが、タタールの男と海をこえて駈落ちしくさったよ」「どういうタタールと?」「だれが知っちゃるかい! クリミアのタタールで、ケルチ生れの船乗りさ」(pp.388; 403; 403; 295)

C.「おいおい、盲目の餓鬼」おれはやつの耳をひっぱってこう言った。「おまえゆうべ包みなんか持ってどこへ行きやがったんだい - ええ、おい?」すると、盲目は泣いたりわめいたり、嘆声をもらしたりしだした。「どこへ行ったかって……どこへも行きはせんがな……包み?……なんの包みよ?」(pp.391; 405; 405; 297)

中村喜和訳 (1971)

A.「主人はどこだ」-「いねえ」と少年はウクライナ語で答えた。-「なんだって? ぜんぜんいないのか」-「いねえだ」-「じゃあ、かみさんは」-「村へ行っちゃっただ」-「それじゃ、だれが戸をあけてくれるんだ」(p.289)

B.「おまえはこの息子がい」わたしはどうとう少年にたずねた。「ちがう」-「じゃあ何だ」-「みなしごだよ、一文なしの」-「かみさんには子供があるのかい」-「いねえ。娘がひとりいだが、タタール人と海のむこうへ行っちゃった」-「どんなタタールだ」-「知るもんかね。クリミアのタタールで、ケルチから来た舟乗りだ」(p.290)

C.「おい、めくらの小僧め」とわたしは彼の耳をつかんで言った。「きさまは夜なかに包みをかかえてどこをほっついていたんだ」すると突然めくらは泣き出し、叫び声をあげたり、溜息をついたりしはじめた。「おらがどこへ行っただと?……どこへも行きやしなかったよう……包みをもってだって?……どんな包みっちゅうだ」(p.294)

岡林菜穂 (1974)

A.「主人は?」-「いやせん」-「いないって? まるきりいないのかい?」-「まるきりでやす」-「おかみさんは?」-「村にでかけておりやす」-「それじゃ一体誰が戸をあけてくれるんだ?」(p.86)

B.「おまえはこの家の子か?」やっと、ぼくは口をきった。「いや」-「じゃ何だ、おまえは?」-「孤児の片輪もんでやす」-「おかみさんに子はあるのか?」-「いや、娘がひとりおったが、タタールと海のあっちへいってしまいやした」-「どんな男だ?」-「知るもんか! クリミアのタタールで、ケルチの船頭でやす」(p.87)

C.「おい、めくらの小悪魔」そいつの耳をひっぱって、ぼくは言った。「いってみろ、

ゆうべ包みをもって、どこへいきやがった、え？」ふいにめくらは泣いたり、わめいたり、おいおいやりだした。「どこへいったと？……どこへもいきやせん……包みって？何のことでやす？」(p.91)

江川卓訳 (1980 ; 1991)

A .「あるじは？」 - 「おらんね」(少年の言葉はウクライナ語で書かれている：訳注)
- 「なんだって？ 全然いないのか？」 - 「じえんじえん」 - 「じゃ、おかみは？」 - 「村へ去んだね」 - 「じゃ、だれが戸を開けてくれるんだ？」(pp.300 ; 526)

B .「おまえ、ここのうちの子か？」ようやくおれは少年にたずねた。「いんにゃ」 - 「じゃ何だ？」 - 「みなしごだ、あわれな」 - 「かみさんには子供がいるのかね？」 - 「いんにゃ、娘がおったが、タタール人と海の向うさ、去んじまった」 - 「タタールって、どんな？」 - 「知るもんか！ クリミア・タタールで、ケルチの舟乗りだ」(pp.300 ; 527)

C .「おい、盲目小僧」やつの耳を引っぱって、おれは言った。「きさま、夜中に包みをもってどこをうろついてた、言ってみろ、え？」すると、盲目のやつ、突然大声をあげて泣きわめき、おいおいやりだした。「おらがどこ行つたと？……どこ行くとね……包みだと？ どげんな包みや？」(pp.303 ; 529)

参考文献

- Ба тминьский Е. (1997) Этноцент изм сте еотипа. Польские и немецкие студенты о своих соседях, *Славяноведение*, 1, с.12-24.
- Белинский В.√. (1954) √е ой нашего в емени, *Полное соб ание сочинений*. т.4, М., с.193-270, 629-634.
- ◇истова И.С. (1981) П имечания, М.Ю. Ле монтов, *Соб ание сочинений в 4-х т.*, т.4, с.462-3.
- ◇истова И.С. (1990) П имечания, М.Ю. Ле монтов, *Соб ание сочинений в 2-х т.*, т.2, с.632.
- Даль В. (1989) *Толковый слова ь живого велико усского языка*, т.1, М., с.LXXXI.
- Большая Советская Энциклопедия*, 2-е изд.
- Ка амзина С.Н. (1989) Нз писем к Меще ской, *М.Ю. Ле монтов в воспоминаниях сов еменников*, М., с.286-7, 289, 566.
- Ле монтовская энциклопедия* (1981) М.
- Ме инский А.М. (1989) М.Ю. Ле монитов в юнке ской школе, *Воспоминания*, с.167.
- Помазнева В. (1976) Домик в Тамани, *Лите ату ная газета* (10.11.1976) с.3.
- Со окин ≈. (1977) Домик у мо я, *Советская Россия* (24.01.1977) с.4.
- Ти ан А.Ф. (1989) Из записок, *Воспоминания*, с.149-53, 521-2, 529-31.
- Толстая С.М. (1993) Этнолингвистика в Люблине, *Славяноведение*, 3, с.47-59.
- ±ейдле М.И. (1989) На Кавказе в т идцатых годах, *Воспоминания*, с.254-8, 558-9.

- Веленгу ин Н. (1978) Музей ле монтовской книги, *Книжное обоз ение*, с.14.
- Заславский И.Я. (1962) Ле монтов, *Ук аїнська Радянська енциклопедя*, т.8, с.107.
- Заславский И.Я. (1981) Ле монтов, *Ук аинская Советская Энциклопедия*, т.6, с.58-9.
- アロンソン著、古畑和孝監訳 (1994) 「偏見」 『ザ・ソーシャル・アニマル (第6版) - 人間行動の社会心理学的研究 - 』サイエンス社 pp.277-328
- 出かず子 (1976) 「短編 『タマーニ』 - レールモントフにおけるアイロニーの表現 - 」 『スラブ研究』 (21) pp.1-29
- ベッテルハイム、ジャンウィッツ著、高坂健次訳 (1986) 「マイノリティのステレオタイプ化」 『社会変動と偏見』 新曜社 pp.194-218
- 池上知子 (1995) 「ステレオタイプの認知モデル」 『愛知教育大学研究報告 教育科学』 (44) pp.169-182
- 金子幸彦 (1975) 「ペチョーリン論」 『ロシア小説論』 岩波書店 pp.1-92
- 亀田達也 (1986) 「ステレオタイプに基づく予期が社会的判断に及ぼす効果 - ベイズモデルによる検討 - 」 『心理学研究』 57 (1) pp.27-34
- 木村 崇 (1975) 「『現代の英雄』の連鎖化の構造 - とりわけマクシム・マクシームイチの位置について - 」 『中京大学教養論叢』 16 (1) pp.171-214
- 小林和夫 (1959) 「ステレオタイプについて - 新聞記事に対する反応傾向についての実験的分析から - 」 『応用社会学研究』 (立教大学社会学部) 2 (1) pp.99-104
- 松井豊、上瀬由美子 (1994) 「血液型ステレオタイプの構造と機能」 『聖心女子大学論集』 82 pp.98-72
- 中里浩明 (1982) 「ステレオタイプの測度に関する研究」 『神戸女学院大学論集』 29 (2) pp.69-78
- 辻 徹也 (1986) 「ステレオタイプの社会心理学 - 嗜好品を中心として - 」 『成城文芸』 117 pp.79-55
- 吉森 護、大坪靖直 (1988) 「ステレオタイプの形成過程に関する研究 - 『誤った関連付け』における媒介変数としての注意の検討」 『広島大学教育学部紀要』 第1部 (37) pp.135-142
- リップマン、掛川トミ子訳 (1997) 『世論』 (上・下) 岩波文庫

作品一覧

- Ле монтов М.Ю. (1988) М.А. Ще баговой, *Сочинения в 2-х т.*, Т.1, М., с.186-7.
- Ле монтов М.Ю. (1990) Княгиня Лиговская, *Сочинения в 2-х т.*, Т.2, М., с.423.
- Ле монтов М.Ю. (1990) Тамань, *Там же*, с.499-509.
- 江川 卓訳 (1980) 「現代の英雄」 『集英社版世界文学全集』 (23) 集英社 pp.247-393
- 同 訳 (1991) 「現代の英雄」 『集英社ギャラリー 世界の文学』 (13) 集英社 pp.475-618
- 岡林茱萸訳 (1974) 「現代の英雄」 『レールモントフ選集』 (1) 光和堂 pp.7-236
- 北垣信行訳 (1969) 「現代の英雄」 『世界文学全集』 (9) 講談社 pp.337-483
- 同 訳 (1973; 1981) 「現代の英雄」 『筑摩世界文学大系』 (31) 筑摩書房 pp.369-467
- 同 訳 (1982) 「現代の英雄」 『世界文学大系』 (26) 筑摩書房 pp.261-359
- 中村 融訳 (1958) 「現代の英雄」 『世界文学全集』 (5) 河出書房新社 pp.235-325

レールモントフにおけるウクライナのテーマ

- 同 訳 (1961) 「現代の英雄」『特製豪華版世界文学全集』(27) 同上 pp.235-325
- 同 訳 (1981) 『現代の英雄』岩波文庫
- 中村白葉訳 (1964) 「現代の英雄」『ロシア・ソビエト文学全集』(2) 平凡社 pp.293-426
- 同 訳 (1965 ; 1966 ; 1971) 『現代の英雄』岩波文庫
- 同 訳 (1972) 「現代の英雄」『決定版世界文学全集』(2) 日本ブッククラブ pp.307-440
- 同 訳 (1975) 「現代の英雄」『コレクターズ版世界文学全集』(25) 日本ブッククラブ
pp.307-440
- 中村喜和訳 (1971) 「現代の英雄」『新集世界の文学』(9) 中央公論社 pp.225-406
- 森 鷗外訳 (1892) 「ぬけうり」『文學評論 志がらみ草紙』(39) pp.1-16
- 同 訳 (1939) 「ぬけうり」『鷗外全集翻譯篇』(12) 岩波書店 pp.89-110